

研究業績書（1/2）

【著書】

- 1993年 5月 a「第二部論文編 日本語の条件文と知識」
b「第三部研究史 日本語条件文研究の変遷」
c「日本語条件文研究文献目録」
d「補説」「付表」
有田節子（『日本語の条件表現』益岡隆志編）くろしお出版
- 1996年 2月 「八のdomain設定機能とテハ構文の二つの解釈」有田節子
（『言語研究の領域 - 小泉保博士古希記念論文集 - 』上田功他編）
大学書林
- 1997年 9月 On the function of the Japanese particle *wa*: New light on two distinct
uses of the *te-wa* construction. Ho-min Sohn & John Haig (eds.) *Japanese
Korean Linguistics*, vol. 6. CSLI: Stanford.
- （近刊）『日本語文法 セルフマスターシリーズ7 条件表現』有田節子・蓮沼昭子・
前田直子 くろしお出版

【研究論文】

- 1991年 1月 「日本語の反事実的条件文における反事実性と述語の形式に関する一考察」
有田節子 『STUDIUM』18（大阪外国語大学大学院研究室）
- 1991年 3月 「日本語の条件表現と叙述の特定性という概念についての一考察」
有田節子 『日本語日本文化』17（大阪外国語大学留学生別科・日本語学科）
- 1992年11月 「日本語における条件と主題の融和について」有田節子
『KLS』12（関西言語学会）
- 1995年 3月 「日本語の提題形式の機能について」有田節子・田窪行則
『人間科学』1号（九州大学文学部）
- 1996年 5月 「因果の言語学」有田節子 『言語』25-5 大修館書店
- 1997年 3月 「日本語の従属文の時制」有田節子 『九大言語学研究室報告』18（九州大学
文学部言語学研究室）
- 1999年 3月 a「プロトタイプから見た日本語の条件文」有田節子 『言語研究』115号（日
本言語学会）
- 1999年12月発行予定 b「テハ構文の二つの解釈について」有田節子 『国語学』199集（国
語学会）

【報告書】

- 1992年 3月 「日本語の条件文研究の展開」有田節子 平成3年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書(02301059)『高度な日本語記述文法書作成のための基礎的研究』代表者 益岡隆志(神戸外国語大学)
- 1998年10月 「統語論と意味論のインターフェースとしてのイベント項の位置づけ」有田節子 平成8・9・10年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書『統語構造と談話構造のインターフェース構築のための理論的研究』代表者 稲田俊明(九州大学文学部)

【学会口頭発表】

- 1990年10月 「日本語の条件表現をめぐって - 叙述の特定性という概念 - 」有田節子日本言語学会第101回大会 (国立民族学博物館)
- 1991年11月 「日本語における条件の主題化について - 「は」の条件的用法と「なら」の主題的用法 - 」有田節子 関西言語学会第16回大会 (京都外国語大学)
- 1993年10月 「テ八文の構造と意味について - 八の集合照応性 - 」有田節子 国語学会平成五年度秋季大会 (北海道大学)
- 1995年 8月 An inquiry into the discourse managing function of a Japanese particle "wa" : An analysis of two distinct uses of the te-wa Construction in Japanese. The 6th Japanese Korean Linguistic Conference at University of Hawaii.
- 1997年 6月 「条件文とプロトタイプ」有田節子 日本認知科学会第14回大会(NTT基礎研究所)
- 1998年 6月 「談話操作から見た日本語の提題形式」有田節子・田窪行則 日本認知科学会第15回大会 (名古屋大学)

【その他】

- 1991年 3月 「日本語の条件表現をめぐって - 時間及び認識論的観点からの考察 - 」有田節子 大阪外国語大学修士論文
- 1992年 3月 「条件表現と他動性」有田節子 京都大学報告論文
- 1993年 3月 「メンタルスペース理論からみた日本語の条件文」有田節子 京都大学報告論文
- 1994年 1月 「文の意味解釈における合成性 - テ八文の意味解釈について - 」有田節子 京都大学報告論文

研究業績書（2/2）

主要な著書・研究論文5点の要旨

業績 1991年 3月 「日本語の条件表現と叙述の特定性という概念についての一考察」有田節子『日本語日本文化』17（大阪外国語大学留学生別科・日本語学科）

要旨： この論文は、日本語の文の階層的性質に基づき、叙述の「特定性」という新しい概念を提案し、それにより日本語の条件形式のバ、タラ、ナラのうち、ナラだけがその節の内部にテンス形式の対立（基本形／タ形）を含むという統語的特徴について分析したものである。特定性という概念は、「現実に定まった事実が存在する」という性質（[+既定]）と「表されている事態が唯一の時点に位置づけられている」という性質（[+唯一時点]）からなる。特定性を持つ叙述は「特定の叙述」で特定性を持たない叙述は「非特定の叙述」である。この区別は、南（1974）、田窪（1987）などで示された日本語の階層構造と関連づけられる。いわゆるA類の副詞節（ナガラ節、ママ節など）は非特定の叙述を表し、B類の副詞節（カラ節、ノデ節など）は特定の叙述を表す。これをバ、タラ、ナラについて検証してみると、バ節、タラ節がスレバ、シタラという形式をとる場合には、A類の副詞節と同様のふるまいを見せ、シテイレバ、シテイタラという形式をとる場合には、B類の副詞節と同様のふるまいを見せることがわかる。一方、ナラ節は常に特定の叙述を表す。「シテイル」という形式がA類の副詞節には現れないことを考慮すると、特定性にはタ形とシテイル形が関わるということがわかる。本稿ではシテイルにはアスペクト的性質とテンス的性質があるとした。ただし、シテイルのテンス的性質はタ形の性質と等価ではない。タ形は事態の真偽値に関わっている。基本形とタ形を含むナラ節は、主節と異なる真偽値が与えられ得るが、シテイレバ節、シテイタラ節は与えられ得ない。特定性という概念は、従来から指摘されてきたナラ形式の持つ特殊性に本質的に関わる概念であることがこの論文によって示された。

業績 1993年5月「第三部研究史 日本語条件文研究の変遷」有田節子『日本語の条件表現』（益岡隆志編 くろしお出版）

要旨： この論文は、日本語の条件文研究の歴史を辿り、現在の研究状況を位置づけ、今後の方向性を示すことを目的とした。まず、いわゆる「呼応論」という見方が崩壊し、日本語の文法研究の関心が品詞から構文に移った段階がある。大槻（1987）が提唱した「呼応論」に対する批判が山田（1908,1936）、松尾（1928）、松下（1928）らによってなされた。次に、条件表現を体系化しようとする動きがある。これは構文論研究の発展と共に森重（1955a,b）、阪倉（1958）、三尾（1958）、佐久間（1940）らによってなされた。この段階で特筆すべきは、従来のように「事実」に基づくのではなく、「話し手」という観点

を取り入れたことである。これと同時期に国立国語研究所による使用実態の調査が行われ、個々の形式の用法の記述がさかんに行われるようになる。そこから個々の形式の用法の特徴づけが行われるようになる。伝統的な流れをくむ山口(1969)、日本語教育用の教材として森田(1967)、Alfonso(1966)が出てきたが、前件と後件の関連性からの分析という共通する特徴を持つ。詳細な用法の分析がさらに進められ、豊田によるトの研究、久野(1973)によるト、タラ、ナラの研究などを経て、Inoue(1979)により、個々の形式の分布についての一般化が提示された。その後、Inoueの一般化をたたき台にして、バと反期待性の問題、ナラと聞き手の断定の問題、過去の事実を表すトとタラの違いなどが分析されていき、用法の記述はかなりのレベルに達してきている。事実性と関連性というこれまでのキーワードは日本語に限らず、自然言語の条件文研究そのものが抱えている問題である。今後は、自然言語の条件文研究において提起された問題を日本語でどう議論するかという方向と、日本語の研究で提起された問題、複数の形式の分布の問題を条件文一般の研究の中でどう位置づけるかという方向で進めていく必要がある。

業績 1995年 3月 「日本語の提題形式の機能について」 有田節子・田窪行則 『人間科学』1号 (九州大学文学部)

要旨: この論文は、対話を知識ベースの更新操作とみる立場から、言語の運用モデルを構成しようとする試みの一環である。言語表現は、知識ベースにおける情報データの構成に関わるものと、情報の入出力、登録、検索、推論、コピー、編集といった情報の操作や制御に関わるものと大きく分けられる。本稿は、日本語の提題形式八を操作意味論的に特徴づけ、われわれが対話において行っている心的操作がどのように言語に反映しているかの一端を明らかにしようとするものである。全ての「A/B」構文を「Aに対するBの述語づけ」とみなし、1) 述語わりあて文(「太郎は賢い」など)と値わりあて文(「責任者は太郎だ」など)に現れる八がそれぞれ同じ機能を担っているのか、2) 八の対比的解釈はどこから出てくるのか、に対して回答を与え、さらに、3) 八の操作的機能と「ッテ」の機能と比較し、本稿の対話管理のモデルに関連づける。1) については、二種類の八には共通の操作的機能を与え、違いは八の前にくる名詞の意味論的性質にあると結論づける。2) についても、八の前にくる名詞の意味論的性質(すなわち、{成立, 不成立}という値域の設定)から導きだし、対比の八に特別な操作的意味を与えていない。さらに、3) については、「ッテ」と八の違いを操作意味論的に「データベース内のどのファイルともリンクされない」と分析している。

業績 1997年 9月 On the function of the Japanese particle *wa*: New light on two distinct uses of the *te-wa* construction. Ho-min Sohn & John Haig (eds.) *Japanese Korean Linguistics*, vol. 6. CSLI: Stanford.

要旨: この論文は、日本語のテ八構文(述語のタ系連用形(「テ形」)+提題形式八)について扱う。この構文には、否定的含意を持つ条件的用法(「友達を裏切っては信用さ

れなくなる」と反復的含意を持つ非条件的用法(「友達を裏切っては捨てた」)がある。この論文は次の二つの問題を解決する。一つは、なぜこの構文が二つの意味的に関連のなさそうな用法を持つのか、という問題である。二つめは、この用法がそれぞれどのように派生されるか、という問題である。一つめの問題に対しては、テ八構文の二つの用法は、統語的にもTensed/Nontensedとして、意味的にもProposition/Actionとして区別され、しかもその区別はテ構文においても認められることから、テ形の統語的意味的性質の違いに求める。二つめの問題に対しては、テ形の性質と八の操作意味論的性質(有田・田窪1996)からそれぞれの用法を派生させる。八の性質は、名詞句だけでなく述語句や節のレベルにおいても一貫していることを主張する。

業績 1999年 3月 「プロトタイプから見た日本語の条件文」有田節子『言語研究』115号 (日本言語学会)

要旨: この論文の目的は、日本語の三つの条件形式(レバ、タラ、ナラ)の分布をプロトタイプ論的に考察することである。自然言語の条件文を次のようなカテゴリーとして仮定する: a)代替世界(alternative world)を構築する、b)代替世界に基づいて推論を行う。さらに条件文の典型例を以下のように仮定する: a)前件Pが成立する世界を仮定する、b)その仮定世界での後件Qの成立を推定する。その上で、二つの問題に説明を与える。一つは、日本語のバ系列の条件形式が三つに分化していることが何を意味するのかという問題、二つめは、条件形式がなぜさまざまな意味を持つように見えるのかという問題である。一つめの問題には条件文の典型例の特徴と日本語の構造的特徴の相互作用により説明が与えられる。条件文の典型例は定義上、a)前件と後件が因果関係にある、という特徴とb)時制本来の役割が欠如している、という特徴を持っている。英語では因果関係の有無と時制のバックシフト現象が対応している。日本語では文を成立させる主語の生起に必ずしも時制(基本形/タ形)が必要とされないという点で英語とは違う。したがって、時制としての役割の欠如はバックシフトではなくレバ、タラとして日本語では現れる。一方、二つめの問題には、プロトタイプ論的なカテゴリーである条件文がどのような成員によって構成されるかという観点から説明が与えられる。プロトタイプ論的アプローチをとることにより、条件構文が普遍的に持つ性質と、個別言語(日本語と英語)の条件形式が独自に持つ性質とが明らかになった。